

TYPE OF
INDUSTRY

激動 の経営

地元で働く

建築用金属パネルなどを手がける山形メタル（山形県新庄市）。社長の庄司正人が前身の「大滝電機」を出身で創立したのが19

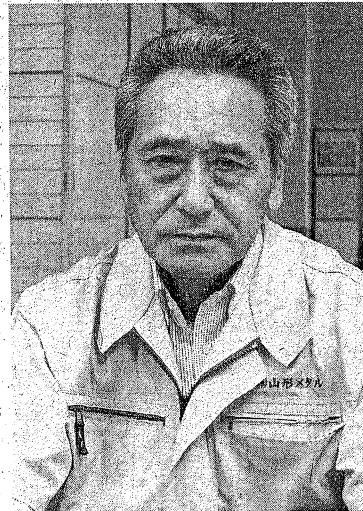
山形メタル

②

74年（昭49）4月。当時周囲で当たり前だった「出稼ぎ」に疑問を抱き、年間通して地元で働くために見いだした道がモノづくりに

山形県北東部に位置する最上地域の真室川町で下請けとしてスタートした。当時、地元で立地していた音響関連会社の仕事で、スピーカーの振動板などの加工を手がけた。ただ順調なスタートではなかった。オイルショックの影響を受け「創立

目指すべき姿へ



バブル崩壊後に「再スタートした」と振り返る庄司社長

から半年ほどでみるみる仕事が減った」と庄司は当時を振り返る。新規事業として建築用金属パネルを手がけることが明け、75年2月頃、あつた外注先の中でも生き残ることができたという。創立から10年ほどで、社員100人以上の会社に育った。

最大の決断
新規事業として建築用金属パネルを手がけるための板金事業を立ち上げたのが85年。板金関連分野の仕事の話が舞い込んだからだ。「音響関係の仕事は労働集約型で、親会社と

自由に営業できる環境構築

の「制約も多い」。庄司は海外シフトが急激な音響分野だけではないと常々思っていた。疑問を持ったら、その解決に動き出すのが庄司のやり方だ。自前の技術を磨き、自由に営業

ができる経営環境を構築する。庄司は会社が目指すべき姿に向けて、次の一歩を踏み出す決断をした。

とはいえ、板金関連の設備は自社になかった。1000万〜2000万円の投資が必要だった。「創業期の最大の決断だった」と振り返る。背中を押した

再スタート
新規事業立ち上げから間もなく世の中はいわゆる「バブル崩壊」の時代になだれ込んだ。すでに大型レーザ加工機などの設備投資をしてきた。結果として、新鋭設備を導入していったことなどで注が大きく減らず、バ

ブル崩壊のダメージを弱めた。しかし経営の体力を高め、筋肉質にするため、祖業の音響事業は94年に完全撤退。同事業からの撤退も踏まえ人員を最盛期の3分の1程度になる約35人までに絞り込み、板金と建築用内外装金属パネルでやっていく「再スタート」を

実行した。そうした中、新たな飛躍の機会が訪れた。山形県内の金属外装パネルを手がける会社との経営統合を持ちかけられた。

(敬称略)

中小・ベンチャー・中小政策